B6判カードを使い 情報を「つぶつぶ」にしてます

発表

スクラップを語るトークイベント「新聞スクラップ わたし流」（読売新聞東京本社主催）が7日、東京・大手町の読売新聞東京本社で開かれた。投書欄が大好きな作家の青山七恵さん、スクラップ歴9年の高校生梅田明日佳君が、80人の参加者に、個性的な切り抜きライフを報告。司会の柴田文隆・東京農業大教授は、実用的な整理法を解説した。

新聞記者を35年やってましたので、いろいろな切り抜き整理術を試しました。細かくジャンル分けしたスクラップ帳に貼ったり、スキャナーで電子化したり。でも挫折の連続でした。今「これでやっていくしかない」と思い定めているのは、切り抜きをB6判（縦12・8チセン、横18・2チセン）の情報カードに貼る方法です。

切る前に日付、新聞名、面名を書き、大きな記事は折ってスティックのりで貼る。守っていただきたいのが「カード1枚、記事1件」のルールです。なぜか。情報を最小単位の「つぶつぶ」状態にしておくことが大事なんです。「つぶ」だと、仕事上の必要性や、自分の関心度の変化に合わせて出し入れは自由自在。大規模な「知の再編」にも対応できます。

カードがたまると何が起こるか。米物理学者ファインマンのノーベル賞受賞メダルが競売にかけられ、1億1000万円で落札されたという記事がありました。「あれ？著名人の遺品が高額で落札されたっていうのがほかにもあったような……」と探すと、ありました。マリリン・モンローがケネディ大統領に贈った時計1400万円、アインシュタインの直筆メモ1億7700万円。ノーベル賞メダルは他にも出品・落札されていました。科学界最高の栄誉も、家族にとってはそんなに貴重でもないということでしょうか。驚きです。コラムが1本書けますね。

記事が書けて役目を終えたカードたちは「女優」「ノーベル賞」といった分類の箱に帰っていく。「つぶつぶ」の状態に戻るわけです。どうです、便利でしょ。

司会
柴田 文隆 さん
東京農業大教授

しばた・ふみたか 元読売新聞科学部長。切り抜きを始めたのは1972年のミュンヘン五輪のとき。体操ニッポンの活躍をたたえる見出しは「減点しようがない」。だが読むと10点満点の9.85点。この「もやもや」体験が新聞への強い関心のきっかけになった。

柴田流のポイント

- ▽B6判カードを使用
- ▽「カード1枚、記事1件」がルール
- ▽記事を切り取る前に、日付、新聞名、「1面」や「社会面」など掲載面を書く

記事を1件ずつ貼ったB6判カード。分類に悩んだら「なんでも箱」に